清水喜市と水平運動

藤　末　康　男

目　　次

1　清水喜市、仲間と共に全国水平社大会に出席
2　神崎郡水平社大会で初代委員長に選ばれる
3　環境改善事業にも死力をつくす　－住宅、排水溝の新設・改良に－
4　兵庫県下三人目、甘地村村長に就任　－教育の改善にも力を注ぐ－

１　清水喜市、仲間と共に全国水平社大会に出席

清水喜市は明治２６年（1893）３月 26 日、八人兄弟の長男として被差別部落に生まれました。生家は裕福で、田畑五町歩を有する大地主でした。このため地元の小学校を卒業後、京都の同志社中学、横浜の英語専門学校に学ぶことができました。しかし、故郷を遠く離れたところでもたびたび差別発言や就職差別、結婚差別を見聞きしました。多感な青春期を迎えた喜市は、子どもの頃の屈辱的な被差別体験とも相まって、次第に都会で安穏に勉学する道より故郷で厳しい差別の現実と向き合う生き方へと思いを強めていったのです。ついには大正２年（1913）20 歳のころ横浜遊学を中途で打ち切りました。帰郷した喜市は、青年団長をつとめるなどして、やがて深く地域の自治活動等にかかわっていきました。ちょうどそのころ兵庫県下の部落解放運動の指導者であった長田調五郎氏と親交を結び、たびたびその指導を受けるところとなりました。

第一次世界大戦後の経済恐慌、米騒動等を経て社会は変化を生じ続け、民主主義のうねりを呼ぶところとなりました。そうした時代背景の中で、大正１１年（1922）３月３日には京都の岡崎公会堂で､部落解放運動の全国組織である水平社の創立大会が行われました。喜市は、この歴史的な創立大会にふるさとの仲間、藤末恵正外３０余名とともに参加しました。長い間、差別に苦しめられてきた人々のお腹からほとばしる声は、人間としての権利を誇り高くうたいあげていました。次々と綱領、宣言、決議が採択され、そこでの感激と興奮は全国からの３０００余名の参加者によりいっそう増幅され生涯忘れ得ぬ感動体験となりました。

２　神崎郡水平社大会で初代委員長に選ばれる

参加者たちは京都岡崎で味わったそのさめやらぬ興奮を地元に熱っぽく伝えました。全国水平社創立の感動の輪は、演説会、座談会を通して県下各地へと広がっていきました。喜市も仲間とともに東奔西走し、演説会を通じては差別の不当性と解放に向かって立ち上がることの大切さを訴えました。その弁舌は常に多くの聴衆に感銘を与えるものでした。そして更には、喜市は同志たちと相図り、地元での水平社支部の設立に着手しました。おかげで各地に先駆け全国水平社創立の翌年、大正１２年（1923）の春、地元神崎郡教正寺の本堂で神崎郡水平社創立大会が挙行されるはこびとなりました。郡内から集まった２００余名の仲間たちを前に、演壇に立った喜市は「我々は決して無理なことを望んでいるのではない。うまいものを食べ、裕福な生活がしたいのでもない。我々の子どもを小学校で普通の子どもたちの横に座らせてやりたい。運動場の片隅に固まっている彼らをみんなと一緒にのびのびと遊ばせてやりたい。そして大きくなったら役場にも勤め、教壇にも立たせたい。心に何のわだかまりもない人間になってもらいたい。我々の望みはそれだけだ。あまりにも当然の要求に過ぎ

写真１　山門・鐘楼

ないのだ。」と訴えました。共感と熱い支持を込めた歓声と拍手の中、喜市は神崎郡委員長に選ばれました。喜市、３０歳の時です。続いて同年４月１８日、播磨水平社創立大会を開催して喜市は神崎郡代表として綱領の朗読と「水平社の必要について」演説をしました。この大会には本部から栗須七郎・米田富・西光万吉・阪本清一郎等が応援に駆けつけ、参加者は７００余名に及ぶ盛況ぶりでした。これより３ケ月後の７月１０日にも神崎郡水平社大会が福崎町辻川振武館で開催されました。

以後も情熱は衰えず、県水平社副委員長も務め部落解放運動に邁進していったのです（その活躍ぶりは当時の新聞にも明らかです）。

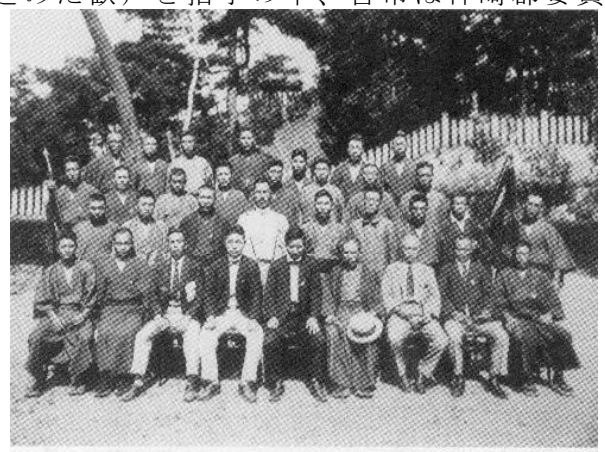

写真２　第６回大会・昭和3.9.23

３　環境改善事業にも死力をつくす－住宅、道路、排水溝の新設・改良に－

ところで、1931 年頃以降ほ満州事変の勃発、世界恐慌の襲来と暗い世相の訪れとなりました。こうした折り、真っ先に影響を受け、悲惨さを味わうのは経済的基盤が脆くて弱い部落の人々でした。また、自然災害にも弱く雨が続けは床上・床下浸水、風が吹けば屋根や家屋そのものに損害が出るといった有様でした。

当然こうした村のようすを長年にわたつて見てきた喜市にとつては、課題ともなり、願いともなったのは、地域の人々の生活を豊かにし、暮らしを高めることでした。

このため、喜市は、1931 年、地域の不良住宅の改善、道路の拡張・新設、排水溝の整備など生活基盤を高めるための事業に着手しました。しかし、事業遂行にあたつての最大の問題点は何と言っても莫大な事業資金です。如何に資金を調達するかです。当然、喜市はやみくもに事業に着手したわけではありません。何か胸算用があったのでしょう。それは、当時の国の動向や運動の流れを視野に入れた喜市ならではの資金調達でした。1932 年、政府は地方改善応急施設 150 万円を予算化しています。また、翌年の 1933 年に行われた全国水平社第１１回大会では、その運動方針に「文化的経済的施設、就職、賃金、その他労働条件に於ける差別待遇撤廃への闘争」を織り込んでいます。喜市はこうした国や地方の動向を視野に入れ、神崎郡清和会副支部長、県水平社幹部という自身の立場を十分に活用して、資金調達を行ったものと推察されるのです。そうでなければ国や県からの補助金など及びもつかなかったでしょう。

難事業で莫大な費用を要する道路工事の総額は当時のお金で２５万円でした。しかし、国と県に補助金としてそのうち５万５０００円もの金額を出させています。当然、地元の負担も１４万円と大きなものでした。当時の甘地村の年間予算５万円と比較してみると如何に大変な事業であつたかを伺い知ることができます。

さらに喜市の優れた洞察力は、当初５ケ年計画であつた事業を当時の経済情勢からインフレを懸念し前倒しをもって３年間で完遂させました。

この時つくられた道路は、幅４メートル、村の東西・南北、各四線がはぼ直角に交わっています。道に沿って排水溝もできました。工事中、村人が「４メートルの幅は広すぎるのでは…」と言った時、「今にこれでも狭くなる」と応えた先見性が語り伝えられています。なお、喜市は自らの屋敷や田畑の一部を提供し、この事業の完成に心血を注ぎました。また、当時の日本は慢性的な不況下でしたが村人は改善事業に燃え、村にほ活気が満ちていました。

写真３　昭和11年道の竣工式

４　兵庫県下３人目、甘地村村長に就任　－教育の改善にも力を注ぐ－

やがて、1936 年６月１１日、これまでの幾方面にわたる活躍により喜市氏は推されて４３歳で第９代甘地村村長に就任しました。被差別部落出身の村長としては神崎郡で初めて、県下で３人目という快挙でした。

その３年８ケ月に及ぶ村長就任期間には、椎蚕協同飼育所の設置や桑畑の開発を行い、女子青年に刺繍や編み物の講習会を開くなど経済基盤を培う等の施策を展開しましたが、最も力を注いだのは教育でした。まず甘地小学校の教員住宅を新設し、校区に住み、親の願いを受け止め、これに応える教育実践の普及に尽力しました。ここには、校長を始め、校区の学校に勤める教員が居住しました。また、昭和１３年には、郡内で最も老朽化した小学校の校舎を、大蔵省貯金部資金から５万５０００円を借り入れ、郡内一の素晴らしい校舎を建設しました。当時の教員は「校舎の建ったときは嬉しかった。一番古いところから、一番モダンになつたのですから」とその思い出を語っています。教育に重点を置く村政は当時の甘地村の財政状況をみれば一目瞭然です。昭和１３年度に於いては神崎郡１７町村のうち国税納入額では１３番目の甘地村が、教育費では、福崎町に次いで郡内二番目の地位を占めていました。

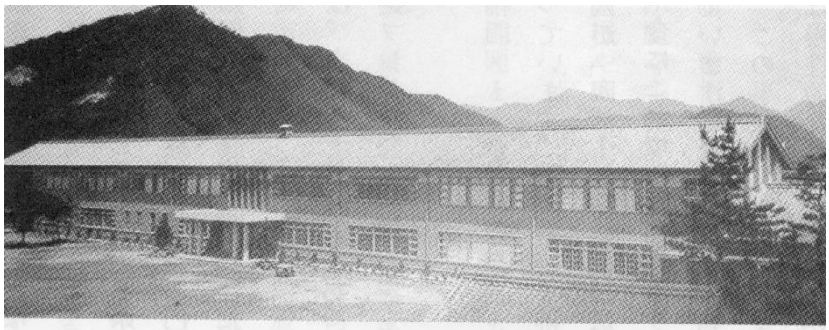
写真４　甘地小学校旧校舎

1939 年、喜市が四十六歳の時、３年余の村長歴をひっさげて広く県政に関与すべく県会議員選挙に出馬しました。選挙戦は、神崎郡では与党の政友会所属の現職と民政党公認の新人、そして中立を標榜する喜市との三つどもえの戦いとなりました。結果は、民政党新人の勝利となりましたが、１４パーセント・1375 票を得た喜市も広く郡内一円に支持されていたことを伺い知ることができます。

喜市の死は突然で、選挙の翌年５月上京中に知人の事務所で脳溢血で倒れ、そのまま不帰の客となってしまいました。

享年４７歳で逝かれた喜市の胸中を伺い知ることはできませんが、喜市を知る人にとつて、その死は惜しみて余りあるものでした。清水喜市の一生を振り返れば、そこには貧困が教育を受ける機会を奪い、無知が劣悪な環境での生活を余儀なくしていくという悪循環の上に乗る部落差別の連鎖を、教育と殖産興業で断ち切ろうとした氏の痕跡が鮮やかです。葬儀は５月７日、ゆかりの教正寺本堂で営まれ、地元の村人を始め全国各地の解放運動関係者や役所の関係者多数が参集し境内に入りきれないはどでした。

写真６　清水喜市

清水喜市は、昭和４２年、兵庫県政１００年を記念して編まれた「郷土百人の先覚者」の一人としてその名を連ねています。

〔参考文献〕
安　達　五　男「郷土百人の先覚者」兵庫県教育委員会の清水喜市
鎌　田　珠　子「兵庫県水平社の結成と地域改善に生涯をかけた清水喜市」
田　宮　　武「聞き書き・部落解放の人たち」「新聞に現れた水平社運動」
大　槻　　守「近代部落史年表　兵庫県神崎郡を中心とした」
『神崎郡誌』

出典：「やさしい市川町の歴史」－資料の宝庫から－
平成１７年７月 25 日発行　編集：市川町史編集室　発行：市川町